布施利華

第381号（令和２年６月１日(月)発行）
発行所
京都女子大学 宗教部
京都市東山区今熊野北日吉町35
電話 075（531）7074

この心深く信ぜること金剛のごとくなるによつて、一切の異見・異学・別解・別行の人等のために動乱破壊せられず。
（善導『観経疏』）

正義の見方

仏教学非常勤講師　清基秀紀

正義の味方

正義とは何だろうか。子どもの頃、テレビには正義の味方がいて、毎週悪者を退治してくれた。

ウルトラマンや仮面ライダー、アンパンマンと、いつの時代にも勧善懲悪のヒーローがいて番組の終了五分前には、いつも正義が勝った。

しかし、彼らはいったい何と戦っていたのだろうか。世界征服をたくらむ秘密結社や、宇宙から地球支配のためにやってきた怪獣など、テレビで戦う相手は明白だった。何度負けても次から次へと登場する悪役は、ある意味、番組の主役でもあった。その悪と戦うことが正義であり、それが善の正体であった。

正義の行方

しかしそのような悪が存在しなければ、彼らのようなヒーローの存在する意味は何なのだろうか。悪の秘密結社もなく宇宙怪獣も来なければ、彼らはどうやって正義を示せばいいのだろうか。

善とは何だろうか。正しい行いとは何だろうか。悪が見えなければ、どうやって善を示せばいいのだろうか。

植民地と宣教師

ヨーロッパ諸国の南米やアジアへの植民地支配には、キリスト教の宣教師が同行した。

権力で支配するよりは、宗教の力を借りるほうが、効果があった。

しかし、宣教師は支配のために宣教をしたのではなく、善意から現地の人々に教えを広めた。

神の恩寵をまだ知らない不幸な人々に、ありがたい神の教えを伝えてあげたい。原始的な土着信仰の代わりに、高度な西洋文明で育まれた宗教を教えてあげれば、みんな喜ぶに違いない。そういった信念や善意が宣教の動機であった。

戦国時代に日本にやってきたポルトガルの宣教師も、本国あての手紙のなかで、仏教という悪魔の宗教から人々を救いたいと思いを伝えている。

そこにあるのは「善意」である。それが彼らの「正義」なのである。自分たちの信じる神こそが善なのだ。一神教では神は一人であり、それ以外の神は存在しない。

自分たちの信じる宗教だけが正しいという独善性は、どの宗教にも存在する問題である。何が本当の善なのか、考えれば考えるほどわからなくなる。善とはいったい何なのか。

仏教の善

仏教における善とは、さとりに至るための方法である。その方法として、八つの正しい道が示されている。

正しい見方、正しい考え、正しい言葉、正しい行い、正しい生活、正しい努力、正しい憶念、正しい精神統一である。

しかし、正しい見方などと言われても、何が正しいのか人によって判断は異なるだろう。

そこで具体的な方法として戒律が示される。仏教徒が行うべき正しい行為ではなく、してはならない行為が戒律である。

殺生はいけない。ウソはいけない。盗んではいけない。不適切な異性関係はいけない。飲酒しないという五つは在家信者が守る戒律だが、修行者に示されるさまざまな戒律は、さとりへの道案内として存在する。

たとえ戒律を破ることがあっても、神によって罰を受け、さとることが出来なくなるわけではない。さとりへの道を見失うことがなければ、回り道となるだけである。

さとりへの正しい道を示すために、誤った方向とは何かを示し、それを回避するように教えてくれる。正しい道を歩んでいると思っていても、気がつくと誤った方向にそれていることがある。何が誤った方向かを示すことによって、道をそれていることに気付かせてくれるのである。

正しさ

正しさとは何だろうか。それを示すことは難しい。それで、正しくないことを示すことで正しさの方向を示す。

交通ルールも、それぞれの車が正しいと考えるスピードや曲がり方でバラバラに走るのではなく、規則を決め、それから外れることを違反として示すことで正しさを示している。

しかし車の少ない時には、制限を超えるスピードで走っても安全だという私の判断が優先する。

私が考える正しさは、その根拠が私にある限り私の煩悩の内にある。私の正義はどこまでも「私の」正義であり、その正しさを疑うことは難しい。

ネットの正義

世の中の不正が報道されると、その不正に関わる個人や企業の名前がインターネットで明らかにされ、匿名の攻撃が執拗に繰り返される。それは「炎上」とよばれる。

テレビのワイドショーでも、不正や悪は徹底して非難され、個人攻撃は繰り返される。「正義」は、視聴者の共感を呼ぶ。

しかし、不正を非難する人は、そんなに立派な存在なのだろうか。匿名であれば自らが非難されることはないが、自らの悪は、他人の悪を非難する「正義」によって覆い隠される。「正義」を叫び正義に酔うものに、自らの悪は見えないのである。

親鸞の他力

親鸞は、仏教における善、さとりに向かう修行を比叡山で二十年間続けた。山の上では誰も疑うことのなかった正しさに対し、自らを深く見つめた親鸞は、修行を続けても続けても、心のなかに潜む煩悩の存在を問題とした。そのような自分の行う善は、本当にさとりに向かうような純粋な善なのだろうか。

親鸞は山をおりた。正しいと信じていた善のあやうさに、気がついたのである。

そして煩悩を捨てきれない人間を救おうと誓う阿弥陀仏の本願に出遇ったのである。

本願を心から信じて、念仏してほしいと言う阿弥陀仏、その念仏は自力でとなえる念仏ではなく、本願のはたらきによる他力の念仏なのである。

自力で行う私の善は、煩悩をかかえた私に起源がある。しかし、本当に純粋な善は、煩悩を離れた私の外から私にはたらきかける他力の善である。

私に根拠をおかないところに、本当の正義がある。

大学若手職員からのメッセージ
③大学における３つの「ポリシー」について

（入学センター　入試係長　林　雅純）

大学に対して、教育上の目的を踏まえて３つのポリシー（ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシー）を策定し、公表することが義務化されていることは広く知られているところである。ディプロマポリシーは学位授与に関する内容、カリキュラムポリシーは教育課程編成に関する内容、そしてアドミッションポリシーは入学者受入れに関する内容となっており、それぞれ大学を構成するうえで絶対不可欠なものとなっている。

創基１００周年を迎えた本学にももちろん３つのポリシーは存在し、公表もされているところであるが、職員として１００年続く歴史の担い手として、いかにしてこれらのポリシーを具体化できるか、あるいは未来を見据えて見直していけるか日々努力する決意である。

特に、今年は高大接続システム改革に伴う入試制度改革を反映した新入試制度導入の年であり、本学においても入試制度の変更や新設を伴ういわゆる入試制度改革を大胆に実施する年となる。そのような中で、本学は「どのような学生を求めるか」そのために「どのような制度で」「どのような評価をもって」入試を実施していくか、これらの「どのような」に当たる「ポリシー」を具体化し、広く社会にアピールしていくことが重要であり、入試実施、広報に反映させていかなければならない。

さて、ここで改めて「ポリシー」について考えてみたい。ポリシーを辞書で調べると「方針」を示していることが分かる。普段当たり前のように使っている言葉も、改めて意味を調べてみると深く考えさせられるものである。普段の自分の考えや行動にポリシーを感じることができるだろうか。ただ毎日をなんとなく過ごしていないだろうか。この原稿を執筆している２０２０年４月、新型コロナウイルスの出現により世界中が大混乱を極めており、本学においても卒業式、入学式の中止に始まり、学年暦においても様々な変更を余儀なくされているが、こんな時だからこそ、ポリシーをもって行動することがいかに重要であるか改めて感じているところである。

社会における激しい環境の変化の中でも自身の軸となるポリシーを常に意識し、それに対して「何のために」「誰のために」「何ができるか」を考えながら行動することが自身に求められていることと感じながら職務に当たることを心がけたいと思う。

澪標

六月に入っても新型コロナウイルスの影響で、対面授業ができない状況にあります。新型コロナウイルスが猛威を振るい始めて以来、各地で助け合いの動きも広がっていますが、一方で感染者やその家族に対しての誹謗中傷も起きています。どうしてこのようなことが起きるのでしょうか。

『歎異抄』九条に親鸞聖人の「いささか所労のこともあれば、死なんずるやらんとこころぼそくおぼゆることも、煩悩の所為なり。」という言葉が紹介されています。ちょっとした病気でもすると、死ぬのではないかと心細く思うのも、私たち誰もが持っている煩悩の仕業だというのです。煩悩とは自己中心的な心のことです。

平常時、心に余裕があるときには、他人にも優しくできます。しかし、自分の存在が脅かされるような事態、今回のようなコロナウイルスの感染という事態に直面すると、感染の恐怖から、思いやりの心もどこかに吹き飛んでしまいます。感染者の家を特定したり、感染者やその家族に心ない言葉を浴びせたりする人まで出ています。不安や恐怖心がそうした行動に走らせるのでしょう。それは親鸞聖人が生きた時代でも、また現代でも何ら変わらないのです。自分の安全が確保されている間は、他の人に優しくできても、自身の存在が脅かされる状況になると、人間が本来持っている自己中心的な心が顔を出してきます。大切なことは、自身がそのような危うい存在であることを知っておくことではないでしょうか。

（普）

災害と京都の近代文化

発達教育学部教授　山野　てるひ

「世のなか　安穏なれ」

十年近く前になるでしょうか。本学キャンパスのいくつかの場所に慎ましく貼られている「世のなか　安穏なれ」という言葉にふと足が止まり、佇まずにはいられないことがありました。私自身、阪神淡路大震災で被災し、その後も鳥インフルエンザや豚インフルエンザなどが流行り、折しも東日本大震災で想像もつかぬ大災害に見舞われた後であったように思います。世のなか、安穏であることが決して当たり前ではなく、どれほど稀で貴いことなのか、思わず頭を垂れる気持ちになったことを思い出します。恥ずかしいのですが、それが『御消息集』の中に出てくる親鸞聖人の言葉「世のなか安穏なれ、仏法ひろまれ」からとられ、七五〇回大遠忌のスローガンであることは後で知りました。

そして今また、新しい令和の時代になって新型コロナウイルスのパンデミックという全く予期せぬ事態が起きてしまいました。緊急事態宣言が出されて大学の授業も対面を避けるために、その対応に追われています。

疫病の流行と「京都策」

近代のわが国の特筆する疫病を振り返ると、コレラが初めて日本に伝播したのが幕末の１８２２年（文政５）と言われています。その強い伝染力と高い死亡率で人々に大変恐れられました。

本学のある京都でも１８７７（明治10）年から９０（明治23）年にかけて、コレラが大流行し、市内全域に広がって犠牲者が多数にのぼる非常事態となっていました。その少し前、１８６９（明治２）年には、東京遷都が決定的な事実となり、二条城を中心として維新政府の首都建設に強い希望を抱いていた京都に打撃を与えた時期でもありました。

しかしながら、この苦境から脱するため、京都は新たな近代化に向けた施策を打ち出します。京都の衰退を防ぎ、復興を図るための諸事業が、明治初年から大正期にかけて行われました。一期から三期及び大正期と分けて考えられていますが、それらは一括して「京都策」と呼ばれています。

中でも注目される事業の一つに、桓武天皇の平安遷都から千百年にあたる１８９５年に合わせて、それまで東京で行われてきた内国勧業博覧会を京都に誘致し、平安遷都１１００年記念祭並びに第四回内国勧業博覧会を開催するという大イベントがありました。しかも、この１８９０年代はコレラだけでなく赤痢や腸チフス、その他の伝染病が多く流行しました。当然、記念祭・博覧会に向けて衛生問題への関心も高まっていきます。伝染病の流行時における対策ばかりではなく、日常的な衛生のあり方について議論が重ねられました。記念祭委員会に衛生部が設けられ、行政主導の「公衆衛生キャンペーン」が展開されます。

ただ残念なことに、このキャンペーンに主体的に関わった医療関係者や衛生家と行政との間には大きな乖離があり、充分な体制を整えることはできませんでした。そのため会期中にコレラが大流行し、祇園祭が順延されたと言います。

それでも、これらの経過によって衛生思想が普及し、伝染病の予防だけに留まらず、環境問題や日常的な健康保険にも広く意識が向けられることになったのです。それは、今で言う「都市計画」の発想の芽生えでもありました。

京都近代文化の形成へ

ご存じの方も多いと思いますが、平安遷都１１００年記念祭並びに第四回内国勧業博覧会の会場となったのが、現在の左京区岡崎公園を中心としたエリアです。京都観光を代表するエリアの一つでもあり、特に平安神宮は平安時代からの古式ゆかしい神社のように思われがちですが、平安遷都１１００年記念祭の目玉となったのがこの平安神宮の創建でした。美術館や工芸館、工業館、機械館、水産館など立ち並ぶパビリオンの一段奥まったところに博覧会の象徴として建設（設計、伊東忠太）されました。つまりまだ創建１２５年の京都の中では新しい神社と言うことになります。

その後、１９３３年（昭和８）、平安神宮の大鳥居の東側に昭和天皇の即位の大礼を記念した大礼記念京都美術館（現京都市京セラ美術館）が建設されました。戦後には大鳥居の西側にあった勧業館別館が国立近代美術館別館（現京都国立近代美術館）として、北側に京都会館（現ロームシアター京都）が次々開館し、博覧会跡地は正しく京都の文化芸術の発信拠点となっていきました。

また私たちに馴染みの深い京都国立博物館も、当初はこの勧業博覧会の開幕にあわせて開館が予定されていました。いくつかの建築場所の候補の中から最終的に「旧恭明宮跡地」と決まったのも、衛生問題から博物館の建設を機に、周辺の環境整備に寄与するという背景があったからだと言います。そして現在、博物館周辺は外資系の大手ホテルが並び、三十三間堂や智積院、妙法院と一体となって多くの人が訪れる人気の文化スポットとなっています。

明治期、京都の先人達は東京遷都による人口減少と疫病の流行という逆境の中で、新しい発想や挑戦を繰り返し、世界から「伝統の中に新しい文化が生まれる都市」として高く評価される近代文化を創り出してきました。

災害や逆境は、一人ひとりに生活や社会のあり方を否応なく考えさせる契機となります。私は、改めて「世のなか　安穏なれ」と、人々が互いを思いやり、共に生きる世界を願わずにはいられません。

参考図書

小林丈広『近代日本と公衆衛生―都市社会史の試み』雄山閣出版　２００１年

『京都学前衛都市モダニズムの京都展』京都国立近代美術館編集　２００９年

『京都国立博物館百年史』京都国立博物館編集　１９９７年

法のことば

この心深く信ぜること金剛のごとくなるによつて、一切の異見・異学・別解・別行の人等のために動乱破壊せられず。

（善導『観経疏』）

浄土真宗の信心は「金剛」、すなわち絶対に壊れないものに喩えられます。金剛のような信心は、浄土真宗と異なる考えを持つ人からも乱されることはないというのです。

ではもし、卓越した知性を持ち尊敬もされている人物が、浄土真宗の阿弥陀仏の救いを否定したら？　実際にあることです。あんな優秀な人が言うのならばもしかして…。

しかし、どれだけ優秀な人の言うことでも、この私の煩悩の解決が見過ごされているなら、本質的には無意味です。そういう「異見」を、「煩悩に迷う者を必ず救う」で丸ごと上書きしてしまうのが阿弥陀仏なのです。優秀な人の名前で動揺するような私の心は金剛ではありません。阿弥陀仏の救いが、もう、お話にならないレベルで最強。それを金剛というのです。

（西　義人）

シリーズ　智慧の蔵㉛

『朝には紅顔ありて』

大谷光真　著　角川書店　二〇〇三年

「心の乾いた時代にどう生きるか。やさしく、深く、説かれた宝石のような書である。私も常に座右に置きたい一冊だ。」

これは、この書物の帯に書かれている五木寛之氏の言葉です。

この書物は、浄土真宗本願寺派第二十四代門主・大谷光真氏が書かれた書物です。現在は、前門主という立場になっておられますが、この書物が発行された時は、まさに、現役の御門主として活動されていた時期でした。御門主と言えば、その宗派のトップであり、本願寺派には、本願寺出版社という組織もあるので、通常、御門主の書物は、そこから出版されていました。

ところが、一般の人に浄土真宗を広めるために、あえて、一般の出版社から発行された、初めての書物が、この『朝には紅顔ありて』なのです。

一般向けに書かれた書物なので、難しい仏教用語は使わず、やさしく仏教（浄土真宗）のこころが伝わる内容になっています。

項目をいくつか挙げると、「人はなぜ生きるのでしょう」「人はみな、願われて生を受けています」「人は誰でも、自分に都合よく生きようとするものです」「鎧を脱いで接したら、世のなかはずっと生きやすい」「私の生き方に、不安や迷いが生じたら…」等、興味深いものがたくさんあります。

また、私が色々なところで紹介する文章は、「善人とは誰のことですか？」というところに収められている話です。

そこには、「善人ばかりの家庭は争いが絶えない」という言葉が紹介されています。この言葉は少しおかしい気がしませんか。通常なら、「悪人ばかりの家庭は争いが絶えない」となるはずです。ところが、悪人と善人がひっくり返っているのです。

続いて、ある家庭でのエピソードが紹介され、なぜ、「善人ばかりの家庭は争いが絶えない」のかに納得させられるとともに、私のあり方が、振り返らされます。

「この書物が、あわただしく過ぎてゆく日々、あるいは、何か物足りなく過ぎてゆく日々を振り返り、生きる意味や喜びを見いだして下さるきっかけになれば私の本望です。」

と、あとがきにあります。

やさしく読めて、深く考えさせられる、お勧めの一冊です。

（小池　秀章）

お知らせ

宗教・文化研究所公開講座（ご案内）

シリーズ：東山から発信する京都の歴史と文化㉒
テ　ー　マ：中世の東北・南九州と京都

開催日　10月10日（第二土曜日）

第一部　13：00～14：30
「イオウガシマ、キカイガシマ、琉球を見る目」
講師　ラ・サール学園教諭
永山　修一　氏

第二部　15：00～16：30
「宮城県で見つかった京都の中世」
講師　東北大学大学院教授
柳原　敏昭　氏

場　所　B501

※当該公開講座は毎年６月に開催していますが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、日程を上記の通り変更しました。

なお、今後の国内や本学の状況によりましては、開催が取り止めとなる場合があります。その場合は、大学ホームページ・京女ポータルにてお知らせします。